

それでも人生にイエスと言う

～ 内界の自由 ～

永田 円了

物事が思い通りにならない。そんな時あなたならどう考えるか？一つの答えは、ああ、これは環境が悪いからだ、もっといい環境に生まれていれば、こんなことにはならなかったのに、、、などと周りを非難する。この思いのウラには、自分を取り巻く環境さえ変えれば、自分はよくなる、つまり、“人間は環境の産物である”という考えがある。



本当にそうであろうか。人間は外の環境さえよければ自動的によくなるのであろうか。もしそうであるなら、人間は単なる、環境の奴隷ということになる。パブロフの犬の事例を知っているであろうか。犬に餌を与える前にベルを鳴らし、そのように習慣づけられた犬は、今度はベルの音を聞いただけでヨダレを垂らすという。人間もこの犬と同じ反応をするのであろうか。

そうではないだろう。私たち人間はベルの音に無条件にヨダレを流すとは思えない。何故なら、人間には外からの刺激に対し、その反応を選択できる“内的な能力”が備わっているからである。

“朱に交われれば赤くなる”という。但しそれは本人自らが赤くなろうと選択したときにのみ赤くなるのである。人はたとえどんな過酷な環境に置かれても、自分の“人生にイエスと言う”生き方を選択できる能力が備わっているのである。



第二次世界大戦中(1940-45)のナチスの強制収容所では、一日 300 グラムの黒パン一切れと 3 グラムのマーガリン、スープのみで過酷な労働を強いられる極限の中、亡くなった人は 800 万人とも 1200 万人とも言われる。しかし、このような地獄の環境にあっても生き残っていく人たちがいた。

一体どういう人が生き残っていったのであろうか。

戦後、連合軍による調査結果は興味深いものであった。それは、生命の維持力と身体的な強靭さの間には、何の関係も見いだせなかった、ということである。つまり、この過酷な環境のもと、生死を分けたも

のは“身体的な強さ”ではなく、“心のもちかた”だったのである。

では、どのような意識(=心)をもった人が生き残ることができたのか。三つあった。 **過酷な環境にあっても、“愛”を実践できた人** **絶望的な環境にあっても、“美”を意識できた人** **どんな環境にあっても、“夢”を捨てなかった人**



外国人による日本語弁論大会で、中国人留学生ワン・ハイシアさんは、「避けられない運命を甘受する心の強さ」と題して、自らのガン再発に対する心の葛藤を述べた。

「人は、何かに悩み苦しむ時こそ、運命に試された時である」「頑張れば必ず報いられると分かっているならば、人はいくらでも頑張ります」「ところが、いくら頑張っても報いがこないかもしれない、となればどうか、、、でも、

「晴れであろうと、曇りであろうと、このかけがいのない人生を意味深いものにしていきたいと思います」。

お金、地位、名誉が全て満たされていても、心が貧しい人がいる。一方、過酷で困難な生活環境にありながら、心が十分満たされている人がいる。この違いは、一体どこから生じるのであろうか。前者は、外界の自由を最優先に考え、後者は、内界の自由の中に、真の喜びを見つけることのできる人である。

出典： ヴィクトール・フランクル著『夜と霧』 みすず書房

ワン・ハイシア女史、『避けられない運命を甘受する心の強さ』 外国人による日本語弁論大会 2007 より